

風餘

柳多留
口十編

9
1147
39



音
久
道

新 9
1147
39



柳多美母は十編

柳多美の連名は母と美と連よ
る名を美とさんとかたつと連
はとも美とつりとも美と美と
ふあふこや道子美と美と
あざれせし好人と似て名人の
美と美と美と美と美と

上
久
り

東子評

日の下々の人をあつめし来吉
 加がけは婦も兼の苗をふま
 硝子の虎衣茶洗とやをん
 地名直橋のうまかすむん
 極ハ美甘茶ハ良男で長生し
 香畑ハ茶茶因田ハ源あん
 毎も大へん甘本へ梅がたま
 味苗子を三ツ及びして味建立

青森 加次 古馬 二所 志丸 志丸 志丸 志丸 志丸 志丸

毎年の子計り物六あつと入
 唱りやんで梅くりの葉を女房道
 みてやあうぢらかんの中いなる
 江戸中へまかせの遠をあつま
 茅田で志のまをけづる舞白あ
 湯かかれりこハ栲皮のあそん
 老口をうけつ流しつ流あつて
 下細子かけてあつる有がさ
 下子子ニ夕子入る因と娘流てま

志丸 志丸 志丸 志丸 志丸 志丸 志丸 志丸 志丸 志丸

久

物船が東海及をわけけまり
十多たまへ程 ぐらひこみ
親子して昔とたのこの目をかぞ
仏ある子ひられ程ととなり
建ある葉やかへかへらあ
やうくといなり程のをばへあ
あれかよーくハあんとかーこまり
たいらのあくびあまてらつとば
女人堂仏の山よ入りまがら

柳

二町 櫻谷 美人 草風 貞徳 不ノ 木系 愚柳 古麻 二

おの
久
り

他がうきて雲井の鳥をねらふん
がらうくーびの志ありお世へあよりま
大女又火跡へ百のすそをらべ
ゆき白木及でついで子孫利心
白石のユ丈夫合をしよす
まろくくとを乾いし書をきてみ
るの書を伝はたすけらあててま
白麻も子の梅をづはらよし
おへハはまらうふめーや乾松白

無多 志夕 貞徳 矢正 如首 伴彦 松柳 古麻 至青

金比羅の白浪うづを巻ていり
ちねるよハのこ此宿祿がえ始め
ぬれし中橋のたもとで三日三
りせんと橋の里のにぎやうさ
板をこめてこの実跡す崩しよ
流石の流板ざるを打てこし
今よりくつをのしよのま月かね
関白のかまはへそりりあり
五月五をすぶ紙巴はとてあ

折

志丸 如雀 寛好 丙夕 不能 加丈 市風 共五 青菴 ノ三

関仕合イ筋の中を月々ある
物いへば唐うすまかあなり
あでえあはあろそよまいふ
かまやへいつけのある屋十
大板を入ると舟の一里の
大森でと食仕立の氣があそ
そ江のらんあままうまほし
たちまらるる橋を吳えの鐘の南
初美のつと中遊あ人でそ

折折 市風 丙夕 二所 砥雲 草麦 矢西 牛渡 齋

一
文
り

大と斗りかかめてのほい廊
又えのよめへ廻て 止 あり
かけてまゝの程 婦の朝のほし
籠子の声 杜のま森の目を送
田楽のころの地ははしをつけ
踊子の連系の中より仇をなま
志やばひ来をさうあ方うなり
にまらふりためらるる地のひん
猪加りの晒落のよめこのうき
柳

程春 廿尺 斗丸 有幸 松林 松山 摺巻 殊川 加太 柳

上
久
り

百子ハのまわがも来ぬ訪一第
茶さうせをくあかて来れ三倉め
三子月ハかせん十五夜おまん
年林の遊を二葉ハあよあ
目と糸のうでちい茶を正し
あさうし天文をるのゆゆ
面白さ一寸ハふさきハや
計妙ハ存あしきまをよ
連城ハかちう親玉和家の浦

二町 門柳 糸森 カラウ 表馬 狐玄 古鳥 市風 娘小

三曲して半らぬれる河沙ん
 細うちの式祿子成るま戸川
 何院とちりておせんがけ仕也
 用の石ね紐を我を身のまは
 乾かへりあふかをろーの若祿や
 かつーめい梅あべこぼちをま
 風流と半百と皆中々さへ
 物成のむらゝあふ六のわい
 土筆を儀毎をでやつこり
 ぬれてちるこたつ十終てあをばし

孤玄
 東夷
 井子
 小父
 升子
 青露
 青露
 果龍

柳四十一
 七

女雀評

色とちあせいく衣をまちかへる
 葉を着らよ大城かゝるさず
 子ぶくをひくけハ九平詩志昇
 十歳程ハこまうまうそかけ橋
 常ハちのが里ッ子集よ入り
 親の湯を子ハあよすもほ右節
 舟えればちぶよかほしまあ後家
 果龍いこくハ地んて連をる

是楽
 雨父
 里松
 市風
 升子
 青露
 青露
 果龍

みよこはイ鼓方巖えてかへり
大文又火津へ百の雲をくべ
休り海堂まきあうむすやうの雲
足を切られてもよつとちてある
松風へ汐の音かきあふ
星一ツんせよまきうりこ
やれおまきうり山がでまいた
赤雲組白雲てく風よなり
侘笑の山及兼子なり

柳四十六

松入りの玉をゆへ樂の川かよの
まきあはなをそらぎのの琴をひき
流るるるるるるるるるるるる
星のうらや白つてももてねなり
藤身よあのをきをまきくすを
様の子をたの補休するつおれお
新せよみ母らよ山人たつねて東
祇のうへもいあつたねるなり
女一足三圓をさうじがせり
ごめをうらぐちこしてまいる大一新

カテウ
ツシロ
流るる
表高
曉多
兼子
孤雲
共津
お徳

五
久
り

坊の改り柳橋道かゝるなり
是を延きあけて桑三合目
笛林の音して桑葉のつけあ
二丁の田地每村の作りあり
園仕合あまのやうな丹あり
あてて思ハ流してよまひなり
流灌ぐおちて馬をばらるを
毛延来せしめうじを交て
紅唯ハ為教先ハ雀あり

柳四十ノ七

切張ハ大のをせしよりおし
大あり死かゝをやつとあけ
瓶よりハ和洋名をま司るを
二人り通る葉につけくまの
せのま六時ハあをあら若月
米帯で田来やくをまくる
宇山の本蓬の葉のそれる
すむひのたけやくのういて
母あやをむすこはうかり

香良 瑞鳥 シト 龍谷 柳雨 孤雲 三枝 春駒 海人

山久

我かけた人もまぶすの声をあし
 船かたりあふちをいしの荒津や
 軍中てうばはあふり甲斐やち
 ずんどうの鯨子生暮のせてあ
 たちまゝの機を呉えの縫をあて
 笑草ハ運おもたぐをーめん
 胎細工あられるゝぞ 撫子あり
 海かたれはとハ格牙のささん
 にしむぢのかあや婦二十人

折四十八

江上戸をくらを大いのかとこ
 素人の舟代うちハなぞをさ
 大たまけあ根へみるにちり
 志かりの志れハ志めこのうさ
 舟の皮おしくしせやハあまはま
 熱葉子まぐらをしせや蛇で切り
 波の底通れと海士の婦 逢ヶ
 老福ぢのさしやさうな母生

笈山 伴六 有幸 フシ江 加丸 門柳 玉春 カラス 里松

文
 あり

やまをがらをへ抗回士志ゆし食
 了靡も海あんたんたんも海をば
 十世奉手を都へ敷敷進てり
 琉球の中らういつぎ子居んを
 首までも子らり子深で遠を悔
 せなあ大病赤痢のヒをなげ
 志保で入王志あん志てまける
 神夷のつこ孝遊ぶ人でもし
 流小網云志遊そかー一本や

折早ノ九
 二山
 無名
 赤子
 門柳
 冥明
 牛糞
 門柳
 荒風
 二石

志保を下女扱るまくと志まきり
 欲せで羊と育女の端をえり
 命をを食まりておくまー一木
 炭アもあて志障でのりさえり
 夫の日より彩粧云のやぐり下々
 二んれいの料理松茸貝割菜
 ぬくろを毎日歩り二んやぐり
 がちのめす下地とじんやあまの
 室毎以の外の後をえんる

其障
 有草
 枕杖
 一佳
 風風
 志丸
 冥明
 曲也

欠

欠
り
あ
り

なげられぬ玉笠跡通草まつれ
うばあぎらぬ衣あ申すだけ
依辰ハ笑乾云を来さうあ

川柳評

志中子蓮草山の田里四方
此も纏い千里をこへりてけ地
まればこそら矢の袂の此誕生
江戸めいどのいのがしハおく同者
僧のちえもすのなす

あつとてハ又と漢人のかいかあ
あつとてハ又と漢人のかいかあ
且ちこれ且ち志ある玉笠跡
如い子ハ似あつな乾を叙やハ
茅所で志のまをけぐる申分あ
様の子をちが神統するつれま
縦づくまかつハ端と七事い
小師ハ武勇を鼻であいら

志丸
碓川
三枝

志丸

三枝

碓川

碓川

碓川

柳屋十

玉笠

依辰

碓川

ヤカマ

松山

玉笠

古史

古史

兄弟ハ侍と志士で知られんが
立入つてはしひのまひゆりつて
つむらひまげは花の由同誓
かゝやくをのす内愛将をまをき
常いあひがまの子集ま入り
志士で入王志あんにてまげら
大も斗りてがめてのまの麻
笑えハ人を下文目する男
田舎なるの地をまめてゆく

柳屋、十一

柳屋
林子
志士
志士
志士
志士
志士
志士
志士
志士

室舟りての舟なまをる。
雲ゆい東海ををかけまはり
浪まゆるもも笑えの故まはり
切く血のたねは種漬が御付
つめくかすのんぶをかんがへる
薬れにつれまんとてゆらぬる
か一正三本をまはげせらる
いつててもありのかつぬ角とて
小使子志士を御をありへさす

曲成
二所
志士
志士
志士
志士
志士
志士
志士
志士

欠
り

西世のまのぬけをかくてをさす
 ぬけまの人の怪をえんでかく
 常島で莊子のまをうるんを
 おまのくまのぬけの首をじ
 せうまのぬけをあす香明
 有りのまのぬけをかくとこ
 常島のや梅をぬくつかりこ
 ぬれまのぬけをえんをいへぬ
 一日のちがいのあが十二文
 浪跡をえて西運をえらん

香山
 楽浦
 大系
 小
 柳
 志丸
 柳
 東夷
 林子
 甘風
 柳
 四
 十二

子玉子紙をひらひやたさる
 物草ままのりをいせやまを切
 玉をのいす姑が志やへるなり
 後書の名車をまけがこよめん
 泣上戸まをせ大の男をり
 じつがさかたへくまやます
 株の子を熊のへの子をすぞの
 志やへるハ財へるをかくる
 る人を止る人へて遊まか

一徳
 玉季
 川柳
 才丸
 侍六
 共多
 砥川
 柳林
 寛政

欠
 欠
 欠

己きぎし子似て物を尋ねるに
 大急もろ子学術のハ極秘伝
 ハ丹めハ神傳流しせやすり
 也み子杜若るるとハ大た日け
 まいえのこやハあめて五子なり
 丹流をむすこ江江のりなり
 ぢらのめす下地うごんややのめ
 義後あハ伝の兒をうるよざり
 本年で世のなる本を講考ぶね

柳屋ノ十三

投ししの純をいめんごとなぞでけ
 比平ハかの子手甘ありは甘あり
 ぬれていりこ入十條でぬをば
 かつけをすくのハ流産毒のせい
 いかことをたかすこ下中まき守
 切えせハあこをわいのんでは
 さらりあのおれよすら酒同や
 るの背をよほだすけらやへる士

共誠
 七カ
 一煙
 共誠
 香園
 盤谷

欠

妾が母にけりてあつりやあぢふも
大い有らばまゝ来たのは百がよ
酒やの戸邊でたぐひなれぬ
五月と下世雑地をなぐすん
てほろおんむくあつてやあひる
程をくま子をふれてあつあせ
室母すりに本らな端をさつ
二親のあつりまねをむけらん

柳早ノ十世

至青
系孫
大メ
斗丸
古及
姫小
聖花
姫小

欠
欠

長あま子かろくさふも百へあり
去来ハ意を違ハかねがなり
神出やてえ附の幕ハ洗流り
袖ありのままひし舟の舟のり
膝もろくある牛尻の尻尾ん
こよこま六大名もあり謎もあり
鳳凰も伝きうまなる海をさ
ちりひらきまきせん秤と練てうり
彩蓮のいんをいふも同をき

曉多
仲麦
玉川
香豆
海老
美人
集言
升二
孫娘

五
久
り

妾が母にけり事こりやあぢふ
 犬一有らてまこ来たのは百が
 海やの戸渡でたぐいなれつ奴
 立丹く下世新地をなぐすん
 てほらかんむくあつてやぶる
 程をく妻子をへれてあつかあせ
 室母すりに本らな端をう
 二親のうらう見れまむけらん

柳早ノ十也

至青
 系海
 天メ
 斗丸
 古及
 姫小
 墨花
 姫小

長あま子かろくさふも百へあり
 去京ハ意を流ハかねがなり
 神時やてえ附の幕ハ流流り
 袖なりままびい舟の手うのり
 鞆るるある牛尻の尻尾ん
 こよこ六大名もあり謹もあり
 風凰も伝きうまなる飯をさ
 ちりひくこまきせん秤と練てうり
 彩造のいんをいふも何とまき

曉也
 柳麦
 玉川
 香豆
 徳也
 美人
 集言
 升二
 孫也

欠落をめぐりてさせる奉加地
 阿東がー上舟のはる水がさり
 巻の江戸けんを道中校がま
 三ヶの津か傳ハみそであるくん
 急へやつとせれるさあ死いやすし
 美の所いづのびてあまきうに候
 井村ハ元甲一丸やハ乾日ん
 大悪がまんとしちハ海きうん
 口一ツ土とハ丁のまきやうさ
 美人
 悪柳
 柳島
 三輪
 行医
 丑友
 柳島
 丑島
 柳島
 柳島十六

扉（あ）後（い）その人をのせ
 巻子みいづのときもあついろ
 加えなりをらへがびんでのなえり
 あついろを長西れへまよたり
 有るりやまいもあつてかき合せ
 なまやうばいしち巻の扉集
 神がいにいふそとあつこのはえり
 のり巻のいふそ海島をまよ
 とんがうをこしとてあつ酒をのり
 美人
 悪柳
 柳島
 三輪
 草毒
 行医
 丑島
 巻坂
 集島

二欠

欠落をめぐくさせる事加座
阿東がー上手のぼろ水が有り
差の江戸けんを近世投がま
三ヶの津か傳ハミをであるく
急(やつと生れる)安死(やすし
其の所(づ)のびて南(ま)ぎうに候
井村ハ五甲(丸)やハ終日
大悪(が)ま(と)い(ち)ハ海(ま)き(ん
口(ツ)土(と)ハ(丁)のま(ぎ)や(う)さ

柳屋、十六

屍(あ)く後(ハ)よその人をのせ
重子(み)い(づ)のてま(も)あ(つ)い(る)中
か(ま)なりを(ら)ハ(び)ん(で)い(な)え(り
あ(つ)い(る)を(長)西(れ)ハ(ま)ま(り
有(り)り(ま)い(と)り(あ)つ(て)か(ま)念(せ
な(ま)わ(る)ば(い)り(る)海(の)房(屋) 候
中(づ)い(こ)ハ(う)そ(と)く(こ)の(ぼ)え(り
の(り)賣(の)い(か)き(海)を(ま)と(は)
と(ん)が(う)を(こ)し(て)揚(ハ)酒(を)の(ま

赤木 鬼柳 三輪 草毒 仔彦 曉島 古島 岩坂 集島

十七
廿三

十五

志んぢうの梅う時くかへるん
かぶのう八位たかれまらういぬけ

女子
天心

箕山評

七日の夜まよかのあ極らなり
紅葉轉りあすのては八車ま
半の付まれま日ま夜をえて時り
あ林へかく日逢てあさうづ
あ帯て見るハまここの秋
さー次子糸也をするかつう始

柳早ノ丸

六五
初多
里暮
柳雨
無多
枕月

はんぢううま二巻かしておをうい
まうあうまのハの月の色のは
次時を一度ハをカてくるハせり
あるまをハ袖をすげたこ小十郎
まば梅て年屋たのしむ酒をうい
道江うふがらす露のあまあ死
四月尾へ子琴ういへるうりしよ
大海の日照風箱なるハあ
たいまうな本らんてこまる信也の

海鳥
林子
徳多
道末
里暮
初多
林子
カマウ
林子

柳の本の下タで文珠のちへ者
下船ぶうりはいてたけう車孝の及
すづらまのち名まかりしきさるち
系ノ王けつらも王へたこ我なり
身を子ハ系やうぶおもあつす
戸隠しハ油の並居ぐりこさげ
つれぐのちやうばかた入海を奉
思義あつてま中こけく梅やま
うんよんの紐も裏破ておつはごま

柳

海鳥 糸多 千花 糸多 矢面 門柳 一徳 カ石 杯子

梅の兄分はなまかけてよ
本若殿も薬師が系ハ夕日ん
五子松新のヤナリニ會目
り帰母も物人の投子入り
毛纏のうくくぬい籠へたち
さんごまぬハ毒の毒系うろす
江戸のより永代の三す奥妙ん
奥子もをまあ斗りの池年云
梅よハつれなま名へあらし山

集書 志水 斗丸 着境 一徳 青枝 玉系 糸多 市風

二尺

ふ仕合二百やすくそたのく
海られて秋矣ハあるかと母あは
おんろうのことなりそろうん名が信し
子なまをばらこまねをうけあし
友の樂王殿の湯王丸のめー
人因しかぶずかびぶとあろむく
日若いゆもとのとあうすあがら
為唄をするとかもて一れをより
あすくだんを何ぞあるかどして男

柳翠ノ北

一徳
五町
市風
赤木
杯舟
雨父
斗丸
仔彦
志父

か散うらハ持よりいひい遠があり
秋ごものうそのたねとい知はずこ
迷子ハ子ありも親うますよこ
ま方のおを近所の為たらん
浅糸でいふれ目為でなかが噂
子信あらんあど噂とあさうばよ
巴ナ七彩ありさうないろはるあ
マアあかんなんしと格子のたましく
こまのの甲うよ百あらんなん

里松
雨旦
里松
共差
鉄巻
玉川
草妻
木契
左馬

二尺

壺のぬけいそろばんのある村志也
 ろんこまあるをすあふ世帯
 目をこすり餅くらん酒くらへ
 きうな愛ひよとをうたかえ合
 とよ身をやつて妙子かのをあり
 ちかこのだちんであをぐ藤麻
 かもろしいつのはらうそく三本
 知つてあり甚だが四ハ三河所
 かなしりふけぬとけやま
 香貞
 二所
 加太
 伊庭
 権油
 松柳
 十松
 柳雨
 杯舟
 柳早ノ九一

舟のね牛るの及よりかざす
 舟その屋やへすはな女らり
 舟門徒の被戒せしてはして台
 かのふハ笑鈴の湯を網
 舟同胃の豆森大んふてま
 坊ハたぐ子でこいふてへかあ
 舟といやつと逢ハないうら首をえれ
 舟つたさ口子風いせやいり舟へ
 舟ちの取化産あれてりあう
 舟也
 一佳
 舟産
 志水
 志父
 甚翁
 柳香
 休子
 松山

仕こらしそらんをこがせを教ん
りやうしよのこをきしひこたれ
武運も久おめハ仕よげん
そ味もい同じおものおらぶる
同カ鼻かないガ細エハまゆらえ
女神の穴をじし不であるめん
志夕
玉季
東夷
茅流
美志
タウ

概声評

天道もろけがごとく筆の毛キ
神代天海山隈のあ智まけ
草妻
島柳
折罕ノ北二

江を東のつきの海大ちがひ
へ不孝者やつらふ笑のあををり
少のちす子うて様をすおま
大江山かへりたるこじがをり
申此子ひやうめんハ袖だて
人たまふらあまらぐや小人治
相志たん像もちがいでちぐま
ありまらてあまこふ答友人
里松
中花
松山
升二
井極
冥唯
墨花
茅流
木季

二尺

廿三
尺

...

仕こあしそらんをこふがを教ん
りやうし(の)ををいひこたれ
武運も久おめハ仕まげん
そ味もい同しおものおらぶる
司カ舞かなハが細工ハまらうん
女神(の)穴をじそであるあん

概声評

天道もさげかどく(の)をキ
神代天浪山(の)あ智まけ

新撰ノ北二

志夕 玉草 東夷 芝流 美云 夕郎 草妻 島柳

江(の)と京(の)の(の)大(の)ち(の)い
へ不(の)学(の)者(の)や(の)つ(の)ら(の)美(の)の(の)あ(の)を(の)を(の)
少(の)の(の)ち(の)す(の)ま(の)う(の)で(の)様(の)を(の)す(の)ち(の)ま(の)ち(の)
大江(の)山(の)の(の)り(の)た(の)る(の)と(の)し(の)が(の)を(の)り(の)
申(の)出(の)子(の)ひ(の)や(の)う(の)め(の)ん(の)ハ(の)油(の)だ(の)く(の)る(の)
人(の)だ(の)ま(の)る(の)ら(の)ま(の)ち(の)が(の)あ(の)小(の)人(の)治(の)
相(の)志(の)た(の)ん(の)は(の)ま(の)ち(の)が(の)い(の)で(の)ち(の)く(の)ら(の)あ(の)
や(の)り(の)ま(の)り(の)て(の)あ(の)ま(の)ち(の)が(の)あ(の)答(の)丈(の)人(の)り(の)

里松 中者 松山 林二 井堀 冥海 墨花 茅流 木草

こよこよハ大後カあり陸カあり
ち縄の茶ヤかぐろの川カん
黄カひちちくさうこのはちのこま
大後のひちち風靴カカハカ
ここのはちハ縄カカハカ
深カマでうもで仲人カハカ
こつろろこやすこたうこ大ちか
ま礎カマてお様カカカカカ
十糸ハたじくここのほカカカ

柳四ノ北也

海人 水花 斗丸 片折 汁人 志水 マイ父 一徳

お仕合と百やすくこぶりなり
あをまらやうまかをる料理人
帳の紐売のうら子織カカハカ
長松もながしを仕合カカハカ
ひんのおさ格こまカカハカ
汁ぬも中カハカハカハカ
七子カカカハカハカハカ
マアカあんなんこ格子のカカハカ
いさぐほカカハカハカハカ

一徳 有且 兼也 茶及 有且 振袖 本暖 亦乐

下村の立子かくねのいもをさけ
 神木の梅すきなりか入てつせ
 美麻よりやつこのへん子傳まよ
 子伝あくらあど伝をささるばよ
 及子小傳うまかつこと
 うりうりこととごぶかつこと
 とうやうまとのいさの目の名のし
 茶種やの塩かしくまのおとぎ
 かのとごぶハ折あつのは白うあ
 柳は十
 林五
 本系
 門柳
 巻名
 玉川
 志夕
 巻板
 休子
 矢西
 共益

香貝
 休子
 巻名
 再又
 不又
 集名
 古名
 巻名
 二所
 松草の有りまうてまい松が園

産かごの通れからいさうな
 遠まうありを志いへるあはれ
 水邊の小島ちこの下々へ誰のえま
 不塔の赤い伝サガ又もくみ
 晴候のすむんがうまうまうとい
 沈足でゆすう子あうむ奥のめん
 姫君のゆきあし 十二世
 鹿へへ後へよその人をのせ
 めつら子の津島川にある暖玉姫
 柳井ノ世
 柳井
 有且
 井二
 立所
 本家
 曉多
 系乃
 亦乐
 本家

集鳥評

加茂よりも葵のえは三河あり
 老ささハ花の露日下 麩 折り
 後西で摘のハ残の眞加へ
 けし差を政子あハ葵あて
 日月の門ハ妻井の外にあり
 水邊がうは女の始を名につけ
 新銘のかこし種ても大あさま
 松ハ皆さうとに法ハ下々されす
 西之
 麩
 矢正
 玉川
 里産
 水産
 杯舟
 水産

若隠木のたて梅を撰たり
 二千年元合てあへるせんのみき
 張良ハ十五毎目で傳をうけ
 塩賣ハよせこ大星ふらいちへ
 大坂ハ六文ぶりのいらさん
 いふけさ境へかもちや借家
 百葉のちこ亭白ハ初とて後
 初ての祭アリく福りこませ
 承安老成進めをにふこつけ

柳四十八廿七

せんたくで海ちりこ母か四天王
 たてものかくがの地森じもの
 小林の釣比宗苗字斗りあり
 三ツふとんやうか子て遠へん
 縁をえん系系幸あ不世はた
 十らまのく嶽を初つらいつ後
 はあり大念よなる味 後
 系れのたひよんはほり事端
 小人鴻産衣子産のちよあ逐

赤木 香取 妙石 香取 妙石 赤木
 高子 松山 井子 射文 不文 有華 井二 シノ

八辨をのがれてへんのきいをうい
 あゝい髪伯父子破戒の罪一ツ
 段川を中くうなるはたじや
 足川の婦子のけらあやーま
 紫ハ菜テより黄をゆくうま
 舟ハ弓子ハ法子存るまらうかや
 ゆびおつてんれハ鏡こごうハゆし
 きすもりもはぢかめこまお下舞
 高ハ他つこあへとも不化と知れ

狂柳 嘆息 如雀 可笑 カテウ 舞鳥 青枝 青菘 カテウ

柳四十一廿八

己なるまどころういせや卯なまかね
 横板子あが利をするあ智公る子
 材木やあまのえへる勢松以
 檄跡ハま是よりわさく福れる
 かへ子身とうあやーまこ下あ思ひ
 泡蓋のうらなハ梅のやうまらひ
 鳥糞のこハいろまひい苗をふま
 まつりい舞息千正もらる氣なり
 下母が扱息思らばなま手うはな

共友 カテウ 井蛙 志丸 伴二 柳子 香臭 ぶろ 玉川

おまやあぐれ下女簪子丸いノ子
手みどりをしてとつらまるも老酒
毎かじよのふねおあひるをつれ
かねてたくみしりかねたれも心
あつと一七番なきはたき足てけし
おまんぢうハ生洲おたハ世トめん
梅子の露かたけしあきたかす

瓶声評

評判の儀はと堀ぼくめたり

掛甲ノ丸

家素

丸友 香久 吉川 五人 小島 糸左 十花

おまやうさ花のあき目あぢ
津代よかあまいさうくあはは
二千多え合てあはひんのよま
はくのみにハ江戸のあハ向キ
あは風をちめてさあすあはひ
個あをすさうをしそをを
建銀もやつぼりあひて足へるち
まいのハいしあぢいハすしあ
かあハ二世と三世のあハの

夷丸 赤夷 高子 共豆 五人 青島 市尾 井二 海島

耳邊梅ちうふ束こまぶめ
 いまへの束梅庵ハ今の束
 本はハ見あ玉の梅の 玉
 友ぞ一ま二幅射の油の香
 彩遣ハまこへる方を知のてり
 うらがらも足せるで遊の名がさし
 大まうなふたは葉子や梅路ハ
 きて肩で存を祓方ばらまかご

柳平ノ三

庄やうふ月の束しし志あり
 葉よりハ又かくべつこむつくく
 箱の葉梅のやう子あぢあぢあり
 南東であらうハサイ悦がえんへも
 かすりのあたれで仮橋をまわり
 くらいこむをづ葉紙が束ていり
 着があて葉の名ふこあられす
 こめく庄人も上こ仕入なり
 子しめの葉ハうらがら日かあり

市原 山折 集巻 志々 葉虫 如菴 柳島 真約 超柳

床書をとりし依流へ流座ん
 ありふれ轉て侍ツをふらうく
 袂袖淵うそをつまぢの道ふん
 舟かごまのふねぬあがるをつれ
 加まほこの板程あつて紋が橋
 不を門メれ八因の籠が鳴き
 内び接は子まう人のま子のこり
 主もろの翁お栗もあるや
 八歌子小袖を着るむじい親

三歌
 赤素
 若笑
 吉門
 集鳥
 スメ
 噺者
 有華

柳翠ノ三

うんのささべんく草が持を終
 女湯て世上のあをこすり合
 華り親華になつて門をすま
 常子も膝むけの免アイル
 小林の鈴比糸苗子斗りなり
 西れを是はいさうこらうり
 け遊る一ツ蓮の茶やを信り
 エツ程のさいごみさうの舟板ん
 妙座の痕をたみやひちてか

升子
 三鈴
 亦楽
 矢正
 香久
 若事
 無事
 蛇内
 升子

一擗て三百五十石をつくり
 徳子入る門へハ島子かまじり
 楊子鳩夫の将うじそせめうせ
 町内の子へを踏子の下へうせ
 能道も二こそせ者持位君あり
 去年入るて茶のむ梅やう
 けけの蓮を子子川カれて深
 米子ふさび母親子まらめさ
 虫をつけらま子擗うハ炎不
 亦乐
 崇素
 カ子
 英誠
 箕山
 升子
 斗丸
 夷物
 志水
 柳平ノ三十二

遠うなけるやあつてもうハね孝妙さ
 汗道共すくなひこほてまらうい
 すてあちのいまたは切れぬ三ノ糸
 まがんとく借す端ハ甚がまれ
 訂のかれでも千金子通男
 首二ツ子方快をてれてきり
 手のついで下廿ハ其形を定てよせ
 三高羊回ごまかづげら去り高切
 まつい成人をいあ月の鏡ときぎ
 振袖
 草妻
 英登
 松山
 寛奴
 可笑
 夷物
 燒野

首のまげ久し湯まぬいぬたんせす
人のおんごうて同業いりををり
ゆかんりやくた鏡光あまをちひ
扱るのを志めて扱るる地を志め
すまこのい志ををとつ扱てゆほし
物てのまつりやうく祢りこませ

川柳評

震面で揃のハ残の冥加なり
かろまぶちをまきた我のかづみ入り

柳屋ノ三十三

二二ハ月子のにして集よ入り
井かゆうけこ字を扱ねれてあり
夫婦なる月子ハ話のらまも近し
春まうな娘もえつる遠傳書
兄弟のなまれハ字法こそあらずん
七雙の一人り目色うちがのち居
ゆけけ及親父のめんこ初ッ子きて
かーいり末代えへぬ翌日見村
ごやく居人も上り方仕入れなり

里雀
集子
マイタ
鬼柳
集子
玉川
吐声
升二
夷物

まぶやまぬ内子欠あす中細言
西れを是はいつととづうーは
柳園く新着(西く成を造り
かご道もあつた尻八付好い
とびりうをいつてあす幕角
昔のみ等のでま(もも)りしや
小松葉を千抱程あす産た
身の内のはつらゆめき達
とけんぶやく志体ら(い)主人(人)ん

柳屋十三年也

水産

菱中

百々

山柳

柳吉

志々

柳吉

升二

芝流

うろ又た旅人身塚奈あてき
侍の浩のこいせは始を皆埋メ
者去を洞なうう子た(あ)か
とやこの坊くも帰らもお子の因
流子席をなうすむこ身をうに
役だちてらゆ(あ)夫ゆをせ(ん)る
的強さんつとめ(あ)ん(あ)か蜀(り)
麦島蛇(あ)なるま(あ)波(う)う(ち)
か(う)ー(あ)は(あ)月(あ)も(あ)志(り)り

シ不

集子

高子

初柳

糸及

スメ

集子

共登

海人

光光ハトきれやのこ指言はし
三ツふとんやまふまふして遠く
安礼若五種香費を供よつれ
象ハ他を思へとも和化そ知れ
大神乐を鼓ふ名おあせて東
口説られて母もせしなき帯をま
大一夜一妻首を下戸福くし
他れさやう子日産ハ二ふさ
江戸まのすじて是子ハねるは

柳四十一三十五

三釘
如石
赤夷
日下
桑虫
振袖
集る
如石
川柳

一玉子ニ本あての尻ツ尾なり
月後のふらち屋后子かまへられ
人乃子妻ついでりあたしみ
佐后ハ石橋山のたきぐ
花者へまのち親又斗り来る
念相の籠よりこてハ又かくなる
三條ノ谷子なりて大門かけおし
故妻をあらやう子口とひまある
水茶やを大所引すりひん也

門柳
玉川
妻虫
柳柳
集る
吐声
藻鏡
古鳥
花塚

出だんごいなりひ人よそくさねる
 ぶくまろづの廻極よりしうのくよ
 ぞりなる舟のままたるやたろ討る
 物づくるとたぶさをよけるあそなり
 居ゆ人るまそののちとこかかり
 かまぶこの板はとあるが紋が橋
 舟の雛草津の端でもあついで
 相次のおせきあふり板は星
 生マ壁子そろはんづくの書を括

柳屋ノ三子
 系及
 赤木
 此因
 集書
 共筆
 夷物
 筆山
 海人
 ヲモセ

子よらさるまへめ腐立あきり
 志んでえりや辰居の柵もあふり
 刺ええのかあべ子やどり風の神
 持来建ち回廊の下女をつれ
 舟かごよのうねおあはちをほれ
 舟のそを歌へるつりさるるり
 らんとうの地籠止者の継取
 丸の円まよ方りくと田舎もの
 文科の舟え二線あてまたま

集書
 百五
 松山
 吐声
 吉門
 水石
 本質
 無山
 川柳

へをるよつけてくからい沢
 角之あかのがやう後安子も亦
 丸の月ありへををあてまこく
 丁谷六のあかき梅おと
 きなまたは地後を用くお徳
 青枝 玉川 里松 井蛙 山花

各門書多留四十編尾

三十七末

○俳諧風書品目録 江都上野 花屋萬次郎

俳風柳橋捨遣十冊 川柳息白洲時代名 四季感雜紙百餘種

同川傍柳 古川柳点 柳橋 二巻

同折句程第々遺稿篇 江戸女文字折句抄也者 編附出 息白洲等句柳橋著

同 五文字折句抄也者 小余宮は事月川の年

同 凡史庵室等身自撰 以り事江戸出島

俳諧 江戸女文字折句抄也者 編附出 息白洲等句柳橋著

